「天気予報いまむかし（気象ブックス022）」

股野宏志　著
成山堂書店，2008年10月
194頁，1800円（本体価格）
ISBN 978-4-425-55211-5

天気予報に関する非常に興味深くかつユニークな本が出版された．著者の股野氏は，気象庁において長年予報業務に携わられた天気予報のエキスパートである．さらに，本書にも述べられているが，天気予報開始の契機となった有名な黒海の嵐について，ルヴェリエの天気図（連続図）を復元され，その経緯を「天気」や「測候時報」に執筆されている．本気象ブックスシリーズでは，「気象と音楽と詩」（気象ブックス005）を執筆され，さらには，CDを出版されるなど，多彩な活動を行っておられる．本書も期待にたがわず，興味深い内容に溢れており，評者は多くの新知識を本書から得ることが出来た．

先ず，本書の目次を示すと，以下のようになっている．

第1章　天気予報の文化的側面
　1　暦（こよみ）と聖（ひじり）と日和見（ひよりみ）
　2　空の気色（けしき）と気（け）
　3　気象
　4　気象学
　5　総観気象学
　6　気象と通信のクロスオーバー（電信気象学）：ルヴェリエの功績
第2章　天気予報の学問的背景
　1　気象学の課題
　2　大気物理学
　3　大気力学
　4　気象力学
　5　総観気象学の力学化
　6　数値予報
　7　天気予報は気象学のシンデレラ
第3章　天気予報の技術的側面
　1　観測技術
　2　通信技術
　3　予報技術
第4章　情報通信時代の天気予報（情報通信気象学）

目次を一見して分かるように，本書では天気予報を文化・学問・技術の3つの側面から論じている．本書の執筆の視点について著者は「はじめに」において，以下のように述べている．

「天気予報の自由化は“天気予報のユビキタス化”である．…ユビキタス天気予報の時代で最も大切なことは，予報を作る側と予報を利用する側が天気のイメージを共有することである．」

「文芸作家が科学者にも劣らぬ洞察力で自然に対するイメージを作品に残している．…素朴に大気の底で生活を営んだ天気俚諺の時代の先人が気象と天気に対して抱いたイメージは現代人にも共感できる貴重な無形文化遺産と言える．」

「天気予報の文化的側面を天気俚諺の時代に遡って序章とし，本論では天気予報の学問的背景と技術的側面に見られる人間の知性の結晶と言える気象と天気に対するイメージについて述べることにした．」

また，「おわりに」において著者は，「時の流れの底には大気の流れが営む気象に対する人間の鋭い感性と知性が一貫して流れている．この感性と知性を現代の人々に生活情報として親しまれている天気予報の文化的側面・学問的背景・技術的側面からお伝えしたいと思って筆を執った．」

このような著者の執筆のモチベーションは本書の随所に遺憾なく発揮されている．

第1章では気象学にとどまらず，日本文学等の多方面の著者の該博な知識に基づいた，数多くの気象に関する事項について含蓄のある説明が展開され，一つ一つの事項を表す言葉に存在する過去からの歴史的重みが感じ取られる．評者などはこの章で実に多くのことを教えられた．また，気象観測や総観気象学の歴史的な背景の説明，ルヴェリエの業績と電信気象学についての説明などは，著者の得意とする分野であり，著者の筆は気象学の歴史の時空を逍遥し，達意の文章を紡ぎだしている．

第2章では天気予報の学問的な基礎を，物理学的な観点から述べるとともに，数値予報の黎明期から関係してきた著者ならではの数値予報に関する歴史的叙述が興味深い．今年は数値予報開始から50年の節目の年であり，このような叙述を読むと感慨深いものがある．

第3章では，天気予報を支える技術的な側面について，観測技術，通信技術，予報技術のそれぞれについて，その発展が簡潔にまとめられている．気象業務の

© 2009　日本気象学会

中枢において，気象庁の国内気象監視計画（NWW）に参画された著者の面目躍如といったところである．

第4章は近年の天気予報について情報通信気象学という切り口でその展望を述べている．そのなかで著者は，「読み書きソロバン天気予報」という言葉で，「教育とマスコミを介しての天気予報は防災情報としても大きな役割を果たし，その結果，…気象災害は大幅に減少した．」

「義務教育の教科に天気予報が含まれている意義は非常に大きい．」

「現代の人々は義務教育で天気予報を日常の社会生活に最も必要な事柄として学んでいるのである．」

と締めくくっている．

学生の理科離れが言われて久しいが，今一度著者の言葉を噛みしめる必要がある．

いずれの章の内容も興味深く，評者などは目からうろこの箇所が数多くあった．また，随所にちりばめられているコラムも，豊富な話題を提供して非常に興味深い．

天気予報についてトータルに理解したいと思われている方，特に気象予報士の方々にとってはまことに興味のつきない本である．一読をお勧めする．

（(財) 日本気象協会　藤谷徳之助）